

# 「明治日本の産業革命遺産」

## 製鉄・製鋼、造船、石炭産業 世界遺産登録

2015年7月6日

幕末から明治にかけ、日本が西洋技術を取り入れながら、自らの力で人を育て、産業を興し、産業国家となったことを物語る「明治日本の産業革命遺産」。8県11市にわたる23の構成資産です。

「わずか50年余りで急速な産業化を達成、非西洋地域に初めて産業化の波及が成功したことを示す」ものです。

産業革命発祥の地、イギリスよりおよそ100年遅れた動きですが、アジアでは一番早く、また、半世紀余りという短い期間に急速に産業化したことも、世界史的な意義があります。

海外の科学技術と自国の伝統の技を融合し、わずか50年あまりで産業化を成し遂げた日本の姿は、世界でも稀有であり、人類共通の遺産としてふさわしい、普遍的な価値を持つものです。

今日の「ものづくり国家日本」の原点であり、先人の偉業を伝える、この素晴らしい遺産の保全と次世代への継承が大事です。

ドイツのボンで開催中の国連教育科学文化機関(ユネスコ)の世界遺産委員会は5日、日本が推薦した「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」の世界文化遺産登録を決定した。軍艦島や八幡製鉄所など、幕末から明治にかけ重工業の近代化を成し遂げた日本の歩みを示す資産の歴史的価値が認められた。

国内からの登録は一昨年(2014年)の富士山、昨年(2015年)の富岡製糸場に続き3年連続。日本の世界文化遺産は15件目、自然遺産を含めると19件目となる。

産業革命遺産は、軍艦島の通称で知られる「端島炭坑」(長崎市)や「三池炭鉱」(福岡県大牟田市など)、国内最古の洋式高炉「橋野鉄鉱山・高炉跡」(岩手県釜石市)、幕末の姿を残す「葦山反射炉」(静岡県伊豆の国市)など8県23施設で構成。「三菱長崎造船所」(長崎市)や「官営八幡製鉄所」(北九州市)など稼働中の資産が国内で初めて登録された。

産業革命遺産と同時期に文化審議会が推した「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」は2016年の登録に向け推薦済みで、同年には東京・上野の国立西洋美術館を含む「仏建築家ル・コルブジェの建築物群」(フランス推薦)も審議される



山口県萩市です。ここには、江戸時代の城の跡や武家、商人の屋敷などが数多く残されています。

街には、日本の近代化を進める上で多くの人材を育てたとされる松下村塾や、洋式軍艦を造った造船所の跡、大砲を作るための鉄を溶かした炉の跡などもあり、幕末に西洋技術を取り入れて、自ら産業化を進めようとした地域社会の姿をよく示しています。

